

「ルオ人」として死ぬということ

椎野若菜

——ケニア・ルオ社会における死者の範疇化と葬送方法について——

一 はじめに

ケニアのルオ(Luo)の村に暮らし始めたところから、私は頻繁に人びとの死に遭遇してきた。真夜中や明け方、村のどこからか死を知らせる長い泣き声が聞こえてくる。雑音のない夜明け前は、遠くからの音声も村中に響き渡る。ときには私が寝ている小屋のつい隣りで、その声が発せられているように近くに感じたものである。私はそうした泣き声を聞いた朝は、夜が明けるとすぐに遺族のもとに足を運び、儀礼に参加しつつ弔いの方法を聞きとっていった。それを重ねるうちに、彼らが最多で一四におよぶ段階を踏んで死者を弔うことが明らかに、また行われるべき儀礼や埋葬の場所が死者によって少しずつ異なることに気づいた。例えばある青年のための弔いの儀礼について聞いていたとき、「彼はまだ結婚もしていなかったからね、ブル(Bura) 儀礼(後述)はやらないんだよ」と彼の叔父は言った。またほかのインフォーマントからは「あの娘は結婚してもいい年だったから、埋葬場所を決めるのがこれから大変だ」であるとか、「あのじいさんはたくさんのお息子をもっていたからブル儀礼も盛大に行われるだろう」、といった答えが返ってくることもあった。

あらゆる社会において、人を葬送する方法にその社会特有の規定が存在する。多くの場合、死亡した人間がその社会において生前にどのような社会的範疇（地位）におり、どのような条件下で生活していたかによって葬送の方法は決定される。さきの私の質問に対する人びとの返答から分かるように、ケニア・ルオ社会においても死者の年齢や既婚・未婚などルオ人が重要視する規準によって死者はある範疇に分類され、各範疇に応じた儀礼の方法、埋葬の場所、といった死者の弔い方が規定されているのである。²²

二 ルオの社会組織と人間関係

ルオの人びとは西ナイロート系に属し、東アフリカ・ケニアを中心に隣国であるウガンダ、タンザニアにかけてヴィクトリア湖周辺に居住している。ケニア共和国の一九八九年のセンサスよれば、ルオ人口は約二六五万人であり、ケニアの中で三番目に大きな民族集団である [Kenya Government 1994]。私の調査地はケニアのヴィクトリア湖畔から約二〇〜四〇キロ内陸に入ったニャンザ州、ホマベイ県内の赤道直下の農牧村である。主食であるトウモロコシ、ソルガムを中心に農業を営み、また財として重要なウシをはじめ、ヤギとヒツジで牧業を営んでいる。

ルオ社会は父系出自が社会の構成原理として重要であり、エヴァンズ・プリチャードの民族誌 [Evans-Pritchard 1940] によって一躍有名になったヌエル社会と同様に、分節リネージ体系が発達している。また婚姻形態は一夫多妻で口承伝承にもとづいた始祖をもつ外婚クランがあり、妻が夫のクランに婚入する夫方居住の形態をとる。一人の既婚男性を中心に、妻たちとその子どもたち、ときに孫までを含む最小の居住単位をダラ (dala) と呼ぶ。ダラとはこの二、三代にわたる居住集団と、その成員たちが家屋を建てて暮らす居住範囲（図参照）の両方をさす。数十のダラが集まりリネージに相当するアニニョラ (anyuola) を構成し、多くのアニニョラがサブ・クランに相当するドート (dhoot) を構成し、いくつかのドートがそれぞれの名前をもつクランに相当する集団を構成し、ルオという民族集団（部族）が成り立っている [cf. Southall

1952⁽³⁾】。

地域社会における地位や役割を明確にするために、性別をもとに組織化する秘密結社のような性別組織や年齢組制(age-set system)、年齢階梯制(age-grade system)といった年齢別組織が見られる社会がある。東アフリカはルオと同じナイロトであるマサイ(Masai)社会をはじめ、とくに多様な年齢別組織があることで知られるが、ルオ社会にはそういった厳格な社会的制度はみられない。同年齡グループを指すムベセ(*mbese*)という言葉はあるものの、そのグループが核となつて儀礼的行為を行なうこともなく、身体的、社会的成長の指標としてのライフステージも、おぼろげながら存在しているにすぎない⁽⁴⁾。また、対面する者どうしが各々の社会的地位に基づいた規範に沿つて行動する、社会人類学でいう冗談関係(joking relationship)や忌避関係(avoidance relationship)といった人間関係のとり方があるが、隣接した地域に居住するバンツー系グシイ(Gusii)社会にみられるほど「松園 一九七九」、ルオ社会においては明確に、厳格に表出しているとはいえない。

基本的にルオ人の生活は男女という性別の二元論⁽⁵⁾をもとに営まれており、日常における人の範疇、すなわち社会的地位は、最小の居住単位であるガラ内の左右、上下、といった方向にもとづいた空間利用に関する規定に反映しており、催される死者儀礼の数や埋葬場所の規定も同様と考えられる。そしてこの基盤であるガラという最小社会からより大きなコミュニティレベルに至るまで、人間関係を円滑にするために、彼らの文化的創造物ともいえる規定やチラ(*chira*)という超自然的力に関連する信念で互いを拘束しあい秩序を保っているといえる⁽⁶⁾。

ルオ社会の人間は、このガラに生まれたときから全てが始まり、またそこで終わるものとされている。後に若干ふれるS・M・オティエノ事件でも話題となった、ルオ人は死ぬときにはホーム(ガラを指す)に帰るのだという根強い主張があったように[Egan 1987]、自分自身の、あるいは所属するガラの存在、またガラで生まれ死ぬかどうか、ということは現代ケニアにおける「ルオ人」としてのアイデンティティ形成と維持に大きく影響している。

本稿ではルオ社会における男女関係の一端を彼らの死者に対する扱いに注目して考えていく。日常生活においては地位

と役割を厳格に規定するような社会組織はみられないものの、死に際してはつきりと人を範疇化するルオ社会において、生前の社会的地位は葬送方法にどのように反映しているのか。「ルオ人」として死ぬためには死者はどのように扱われ、どのような手続きをふむことになっているのか。また埋葬の段階でどのようなことが問題となるのか。この諸相を明らかにするために、まず死者儀礼の方法を概観したのちに、どのように死者を範疇化し葬送を行なっているのかを男女別に整理し、各範疇に該当する埋葬方法を図示し、その際に生じる問題を指摘する、というすすめかたをとることにする。

三 ルオ社会における死者儀礼

ルオ社会で人が死亡した際、葬送するために次のような最多で一四の儀礼的段階が用意されている。⁽⁷⁾

(一) 死のアナウンス

(二) 通夜

(三) 墓掘り

(四) 埋葬

(五) 「ブル・マティン」儀礼

これはもともと戦士のための儀礼であり、現在は青年に達した男性が死亡すると行なう。英国による植民地化以前はとくに隣接クランやグシイやランゴ(Lango)といった他民族との戦いがしばしば行われており、この儀礼はその一環として行なわれていた。そうした戦いが行われなくなった現在は、死者の父方親族の男たちが多数のウシを連れ、かつての戦いの場(thin)をめざす。人びとは「悪霊を追い払うためにやる」、だとか「死者の家から彼の魂とかつての戦場までともに行く。その原っぱには昔の戦いで勇敢であった英雄の魂がたくさんいて、彼の魂は彼らと一緒にいるのだ」という。

(六) 剃髪

死者の近親が剃髪する。

(七) 会葬者の帰宅

弔いのために集っていた近親たちが各々のダラへ、年長者から順に帰って行く。

(八) 「戸を開く」儀礼

死者やその父のダラから婚出した女たちは各々食料を持参し、隣人を招いて小さな共食会をする。人びとは「亡くなった人をあとに、残った者は再び新たな生活を始めるという意味があるのだ」、「亡くなった人と残された家族を慰めるためだ」と説明する。

(九) 「料理する」儀礼

戸を開く儀礼と同じく死者やその父のダラから婚出した娘が食糧を持参し、隣人を招く共食会である。

(一〇) 「ブル・マドウオン」儀礼

この行事は、長老男性が亡くなった時に催される。(五) 段階目のブル・マティンの大規模なものである。

(一一) 「服喪に行く」儀礼

死者の配偶者の、服喪の終わりを示す行事である。夫が死亡した場合は、妻が他の男(寡婦相続者)と関係を結ぶ前に生家に帰り、両親にその旨を報告する。妻は生家から帰宅すると同時に、寡婦相続されることになっている。第一夫人が死亡した場合は、夫が妻の生家を長男とともに訪問する。

(一二) 遺品の分配

死者が日常に使っていた所有物を分配する。

(一三) 「思い出す」儀礼

親族が死者の生前の家屋周辺に集まり、共食しながら死者を思いだし、慰め、また懐かしむ。

(二四)「ブド」儀礼

既婚女性(妻)や既婚男性(夫)が死亡した場合、妻方親族が遺族を慰めるために食糧を携えて訪れ、共食する。既婚の長老男性が死亡したときにはこれら全ての儀礼的段階をふむことになっており、一二番目の段階までは現在、約一年の期間がかけられる。一三番目の「思い出す」儀礼は遺族の経済事情により毎年または隔年で行われ、妻方親族による「ブド」儀礼が先に行われることがある⁽⁸⁾。

四 死に際して顕在化する人の社会的範疇

どのような人が死ぬと、どのように弔うか。一四段階ある死者儀礼のうち、何が省略されるのか。半年で私が死から立ち会った成人の死者の数は男性七人、女性四人の計十一人であるが、各人のために実施された弔いの儀礼的段階や儀礼の施行者、埋葬の位置は多様であった。そしてその多様性に注目すると、死者が生前に有していた社会的地位によつて葬送の儀礼数と埋葬の位置の違いがあり、その地位、すなわち社会的範疇を決定づけているのは性別、年齢、既婚・未婚、結婚の順番(第何夫人であるか)、子ども(息子)の有無、ダラの有無、といった六点の規準であることが浮かび上がった。それをもとに分類すると次のように男性で六、女性で八の範疇に整理できる⁽⁹⁾。

●男性死者の場合

(A) 乳幼児。その母は剃髪されたのち生家に帰り、肉を^ご馳走してもらう(一一)の「服喪に行く」儀礼。この範疇に属する場合はまだ人として認知されていないため、他の儀礼はいつさい行われない。

(B) 幼年・少年。ブル儀礼(五)段階、(二〇)段階は元来戦士のためのものなので、少年のためには行なうに至らない。

(C) 青年。(五)段階目のブル・マティン儀礼が行われるようになる。

(D) 成年。結婚しているが未だ息子をもたず、父親のガラ内に居住していた男性。

(E) 成年〜壮年。結婚しており息子はいるが、未だ自分のガラを築いていなかった男性。

(F) 壮年〜老年。結婚しており、息子もおり、自分のガラを築いていた男性。ルオ社会で一人前の男性として認められる。そのまま年を重ね曾孫も多くもった長老は、より地位が高い人物として(二〇)段階目のブル・マドウオン儀礼まで盛大に行なわれる。

●女性死者の場合

(イ) 乳幼児。行われる死者儀礼はその母が剃髪を行ない、そのうち生家に帰り肉をご馳走してもらう(一一)の「服喪に行く」儀礼)のみである。まだ人として認知されていないため、他の儀礼はいつさい行なわれない。

(ロ) 少女。行われる死者儀礼はその母が剃髪を行なうのみで、他の儀礼はいつさい行なわれない。

(ハ) 青年〜成年。初潮後で結婚適齢期だが未婚のまま死亡し、遺体の引き取り手が見つからず、生家のガラの外に埋葬された成熟した女性。生家のガラ内に埋葬されることはない。結婚できなかったという無念さのため、生者の世界の家族に悪影響を及ぼすとして最も恐れられている。

(ニ) 青年〜成年。未婚のまま死亡したが、遺体の引き取り手が見つかり外婚クランに属すガラ内に埋葬された女性。姉の婚入先に最年少の妻として埋葬されるか、ある男性が遺体を引き取り彼の最年少の妻として埋葬した後、彼女の代わり妹をもらい受ける、といったことが行なわれる。

(ホ) 青年〜老年。第一夫人として婚入したが息子がいないまま死亡した女性。多くの場合、彼女の夫はまだ自分のガラを築いていない、Dの範疇に属していることが多い。

(ヘ) 青年〜老年。第一夫人として婚入し、息子を残して死亡した女性。夫が自分のガラを築き、そこに彼女も家屋をもっていた場合(男性の範疇Fに相当する)、ルオ女性として最も安定した地位にあったことになる。従って葬送の方法も女性の中で最も手厚くなされる。

表 1 男性が死亡した場合の範疇化と死者儀礼の段階（注 1）

死者の 社会的地位範疇	死者儀礼の段階		(5)	(6)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)
			「ブル・マ ティン」 儀礼	剃髪	「戸を 開く」 儀礼	「料理 する」 儀礼	「ブル・マ ドゥ・オ ン」 儀礼	「服喪に行 く」儀礼＋ 寡婦相続	遺品の 分配	「思い 出す」 儀礼	「ブ ド」 儀礼
(A) 乳幼児			×	○	×	×	×	○	×	×	×
(B) 少年			×	○	○	×	×	○	×	×	×
(C) 青年			○	○	△	○	×	○	×	×	×
(D) 既婚男性 (子供、ダラなし)			○	○★	△	×	×	★	×	○	◎
(E) 既婚男性 (子供あり、ダラなし)			○	○★	△	×	×	★○(息子)	×	○	◎
(F) 既婚男性 (子供、ダラあり)			○	○★	△	○	○ (注 2)	★○(息子)	○	○	◎

<表中の記号：儀礼の施行者の種類を示す>

×：施行者なし、儀礼はなし ○：死者の生家出身者（両親、兄弟、息子など） △ 死者の生家からの婚出者 ★：死者の配偶者（妻） ◎：妻方親族

（注 1） 死者を弔う一四の儀礼的段階のうち、死が生じた段階から埋葬までの行為は誰でも経る段階である。したがって、表の上では（1）から（4）、さらに（7）も便宜上省略し（5）段階目のブル・マティン儀礼からとりあげた。

（注 2） （10）のブル・マドゥ・オン儀礼は長老のための儀礼なので既婚で子供あり、自らのダラを所有という条件を満たしていても若年には適用されない。

（ト）青年→老年。第二夫人、第三夫人……として
て婚入したが、息子をもたないまま死亡した
女性。夫はすでに自分のダラを築いている場
合が多い。

（チ）青年→老年。第二夫人、第三夫人……とし
て婚入し、息子を残して死亡した女性。

また儀礼の数と施行者に注目し、分類して得
た範疇を縦軸に、儀礼の施行方法を横軸にとり、
二つの軸がどのように関わるのかを性別に整理
すると表 1、2 のようになる。

性別に整理した表からは、死者儀礼の数に注
目してみると戦士、すなわち男性のための儀礼
であるブル儀礼（五）段階、（二〇）段階に相当
の有無の他は、男女ともに行なうべき儀礼は同
じである。しかし男女ともに未婚・既婚の規
準や埋葬の場所が範疇化の鍵になっており、行な
われる儀礼の数やその施行者・参加者に大きな
差が生じてくることが分かる。

他方、成熟した未婚女性が瀕死の状態である
場合はまず彼女の死に場所が、そして死亡した

表 2 女性が死亡した場合の範疇化と死者儀礼の段階

死者の 社会的地位の範疇	死者儀礼の段階	(5)	(6)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)
		「ブル・マ ティン」 儀礼	剃髪	「戸を開 く」儀礼	「料理 する」 儀礼	「ブル・マ ドゥ・オ ン」儀礼	「服喪に 行く」儀 礼 + 寡 婦相続	遺品の 分配	「思い出 す」儀礼	「ブ ド」 儀礼
(イ) 乳幼児		×	○	×	×	×	○	×	×	×
(ロ) 少女		×	○	×	×	×	×	×	×	×
(ハ) 青年女性 (生家のグラ外に 埋葬された場合)		×	×	×	×	×	×	×	×	×
(ニ) 青年女性 (他クランのグラ に、一人の夫人と して埋葬された場 合)		×	○	(○)(●) (注 3)	×	×	×	×	×	×
(ホ) 第一夫人 (息子なし)		×	○★	(1)◎ (2)▲ (注 4)	▲	×	×	●	★●	×
(ヘ) 第一夫人 (息子あり)		×	○★	(1)◎ (2)▲ (注 4)	▲	×	★● (息子)	●	★●	×
(ト) 第二夫人 第三夫人… (息子なし)		×	★	(1)◎ (2)▲ (注 4)	▲	×	×	●	(★)(●)	◎
(チ) 第二夫人 第三夫人… (息子あり)		×	★○	(1)◎ (2)▲ (注 4)	▲	×	★● (息子)	●	★●	◎

<表内の記号：儀礼の施行者の種類を示す>

×：施行者なし、儀礼なし ○：死者の両親 ◎：死者（妻）の親族 ★：死者の配偶者（夫）
●：死者の婚入先（夫の生家の親族）、死者の息子を含む ▲：死者の婚入先（夫の生家）から
の婚出者（e.g.）娘、夫の姉妹たち

(注 3) 死者（女性）の生家、また遺体の受入先に経済的余裕があれば行なう。

(注 4) ルオ女性は、夫方クランに婚入し夫方居住をするようになるため、死者が既婚女性の場合
は妻側の親族が夫側へ弔問にくる。とくに「戸を開く」儀礼は、夫側と妻側の双方の
親族によって行われることになっているため、儀礼を同じ日に行なう場合、かまどは別
に構えて調理し、同じ日に行えなかった場合は別の日を設定して行なう。

あとは彼女を埋葬する場所が決定されるまで、その死者のおかれた状況は不安定なままとする。つまり埋葬の場所の決定が、(ハ)か(ニ)のいずれの範疇に属するのかわからないという違いの規程になっているのである。

さきに提示した表は儀礼の数と施行者に注目したもののだが、死者を葬送する際に重要であるのは、埋葬する場所である。埋葬する場所が決定しなければ、どの儀礼も始まらないのである。例えば死者がどの社会的範疇に該当し、その範疇に適した死亡の仕方をしたか否かによって、埋葬場所の決定はときに大きな問題になる。埋葬の場所についての決まりやそのこだわりは、彼らのもつ空間的観念が反映していると考えられるからである。

その一端をみるために、次に死者の属す範疇によって埋葬する位置にどのような違いが生じるかみてみよう。まず現代ルオが語る埋葬する場所についての規則を説明した後、それに適応できなかった場合に人びとがどのように対処するのかをとりあげる。

五 ルオの居住空間の利用と埋葬場所の規定

ルオは長幼、結婚の順、といった序列⁽¹⁰⁾に基づき、空間と方角を思考する人びとである。それは家屋の配置、ダラの建設方法、そして埋葬場所の規則にもあらわれている。ダラ内はあらゆる決定権をもつ中心的存在である第一夫人の家屋が門より中心点を通った上方に位置し、第二夫人以下はそれぞれの妻が所有する家屋が然るべき位置に建てられている。すなわち第二夫人の家屋は第一夫人の家屋の右隣、また第三夫人の家屋はその左隣、第四夫人の家屋は第二夫人の家屋の右隣、第五夫人の家屋は第三夫人の家屋の左隣……と戸口は門に対することなく、ダラの中心に向くように建てられる。こうした家屋建設の場所を実際に指定するのは、夫の役割のひとつである。

ルオの慣習では、一二、三歳頃の少年になると父のダラ内にシンバ(*simba*)と呼ばれる小屋を建てるのが期待される。シンバは序列に基づき、長男から次男、三男という順番でそれぞれ父の指定した場所に建てることになっている。第

一夫人の家屋を中心に、ダラの門の方向をみて右側に長男のシンバ、左側に次男、三男は右側……というように序列にもとづいて交互に家屋を配置していくのである。結婚して一、二年経ち子どもが一人―二人できると、息子は父のダラから独立して自分自身のダラをもつことが要求される。自分のダラをもち、ダラ内の運営権をもったとき、初めて一人前のルオの男と見なされる(表(F))。従って男性の場合、自らのダラを築いたか否かが弔われ方の大きな違いとなるのである。ちなみに、第二夫人を迎えるのは自らのダラを建ててから、ということが多い。

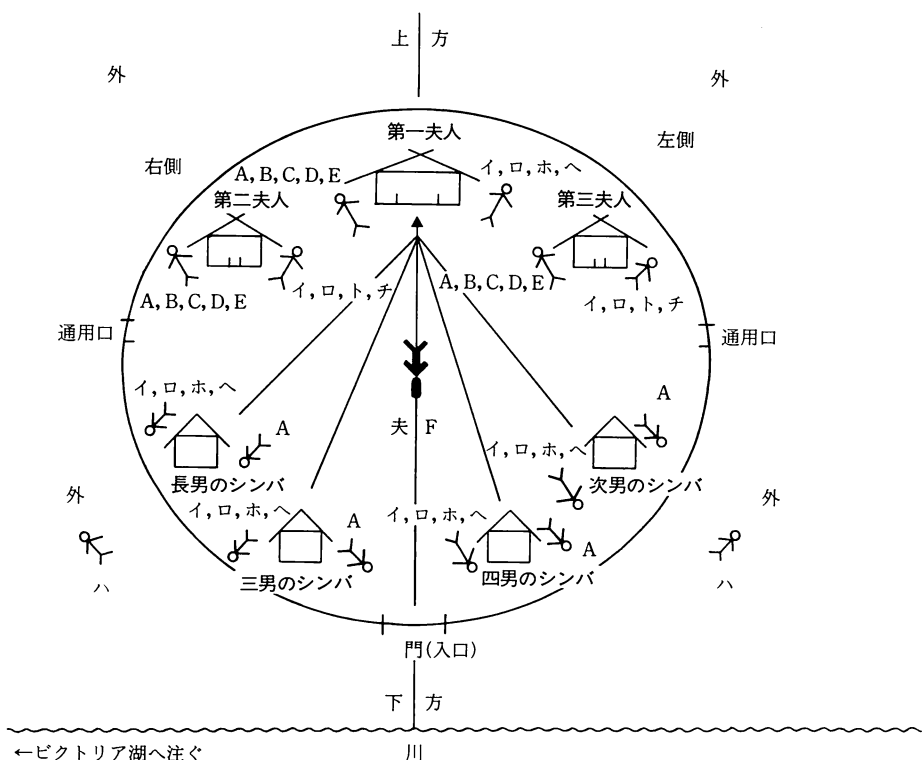
現在みられる埋葬の位置についての規則も、こうした生活空間についての思考から導かれているものと考えられる。聞き取りによれば、かつては人が死ぬと、その人の家屋内の戸口近くに埋葬していたという。一九〇六年の報告では、キスム地域のカヴィロンドの人びと(ルオをさす)は家屋内に人を埋葬している、とある [Millikin 1966: 54]。いつ頃から変化したのかは不明だが、現在の私の調査地では、どのような人間が死亡した場合でも埋葬の場所は家屋の外であり、社会的範疇(地位)によって埋葬の位置が定められている。さきの一部において分類した範疇と記号に基づいて、誰がどのように埋葬されることになっているのかをみてみよう。

未婚の男子(表1、図(A)、(B)、(C))が死亡した場合は母親の家屋の右側に、未成熟の女子(表2、図(イ)、(ロ))の場合は母親の家屋の左側に埋葬されることになっている。

成熟した未婚の女性(表2、図(ハ))が死ぬと生家の敷地内には葬れないことになっているため、遺体の引き取り手がみつからない限り、ダラの外に埋葬される。

既婚女性(表2、図(ホ)、(ヘ)、(ト)、(チ))が死ぬと、彼女の家の左側に埋葬することになっている。

既婚男性の場合、彼が自分のダラを築いているか否かで埋葬場所が異なる。自分のダラを築いていた場合は第一夫人の家屋の右側か、あるいは大抵、ダラの中心部に埋葬される。死亡してからも彼のダラ内を見守りつづけるため、頭部は妻たちとは反対の、門の方向に向け埋められるという(図(F))。ダラの長のほかは、みな頭部はダラの外に向かって埋葬されるのである。



(注) 図中のアルファベットとカナは、表で示した人の範疇と対応している。また矢印は、門とシンバの戸口がみな第一夫人の家屋に向いていることを示している。

図 ダラ (dala) 内の家屋配置と埋葬場所

結婚したものの、未だ父親のダラ内のシンバに住んでいた男性(表1、図(D)、(E))が死亡した場合、彼は実母の家屋の右側に埋められる。その妻が死んだ場合は妻のみが彼のシンバの左手に埋葬され、家屋をはさんで夫妻が対に埋葬されることはない(表2、図(ホ)、(ヘ))。

こうした規則を知ってルオの村落を歩き回ると、各ダラの構成員の基本的情報を読みとれることになる。ダラの長は健在であるか、妻の数、年頃の息子の数はどうであるか。中心部や家屋の後方に盛られた土があれば、死人の数や性別などの死亡当時の属性も一目瞭然なのである。

六 埋葬場所が問題になる場合

ルオ社会では人が死亡すると、その時点で死者が属していた範疇によって、上述のような規則にもとづいて葬られるこ

とになっている。しかしルオ人が考える「埋葬すべき場所」に対して死者がふさわしい資格をもたないとき、あるいはふさわしい場所が見つからないとき、その死者のための埋葬場所が問題になるのである。死者儀礼を遂行する過程で生じる問題は幾種類があるが、それらは埋葬場所に関する問題、また儀礼的性交に関する問題の大きく二つに分けられる。いずれも規定を守ろうとするがために生じる問題であるが、本稿ではとくに前者の事例をあげる。⁽¹⁾

また、埋葬が完了しないからには何の死者儀礼も進めることはできないために、儀礼の施行方法よりも埋葬の場所が重大な問題になる、というのも事実である。次にこれまで整理し提示してきた、四章での死者の範疇や儀礼施行についての表1と2、五章の埋葬場所の規則と図などに照らし合わせながら、いくつかの事例をあげてみることにしよう。

事例一 未婚女性の場合

人の弔いの方方法について聞いているときに、あるインフオーマントは年頃の娘を指して言った。「このくらいの娘が死ぬと、われわれはもつとも恐れるんだよ。死んだあとときどきガラに戻ってきて、残った家族に悪さをするんじゃないかと思うからね。だからガラ外の遠くに埋葬するんだ。」

ルオ社会では、未婚で成熟した女性（ハ）の範疇に該当が結婚した状態で死ねなかった場合、結婚できなかったという無念さから婚出した姉妹をはじめその子ども、また姻族の女性にすら死や不妊などの不幸や悪影響を及ぼすと考えられている。この無念や妬みからくる未婚女性の恨みが死霊の中でも最も強いとされ、最も恐れられている。それゆえ未婚女性は出身ガラから外され、一人で葬られるべきなのである。表1、2からも分かるように、儀礼施行の有無については（ハ）の範疇の女性の扱いが最も手薄である。また死後もガラという日常生活の基盤である空間から、家族の成員からも外されて葬られる運命にある。従って、埋葬方法の選択肢としては（1）結婚した姉の婚出先に埋葬する、（2）他クランの男のガラ内に埋葬する、（3）生家のガラ外に埋葬する、の三通りが用意されている。インフオーマントが語った事例は、彼女の遺体を引き取る男性が見つからなかった（3）の場合に該当するのである。⁽¹²⁾つまり表2に照らしあわせると、（1）と（2）の選択肢は死者を妻として既婚女性の配置で埋葬することを承諾する男性を発見し次第実現するのであり、範疇の（三）

に該当するが、(3) は最後の選択肢で (ハ) に該当することになる。

父系のルオ社会では、娘は生家の家族成員でなくなるべき存在であり、成熟した女性は基本的に既婚の状態で死ぬものとされている。⁽¹³⁾ 財は全て男性に相続され女性は婚出するものと考えられているので、生家に長くいることはよしとされないものである。従って成熟した未婚女性が死亡した場合、その死霊の強さを恐れ、生者に対し妬みが生じないようできるかぎり (1) か (2) の選択肢を選ぶよう遺族は遺体を引き受けてくれる男性を探し、彼女をうまく埋葬するために奔走するのである。

事例二 未婚の子持ち女性の場合

私が世話になっていた家の娘は未婚であつたが妊娠してしまい、病弱だつたこともあり死産した直後に彼女自身も亡くなつてしまつた。彼女が死産し死亡したのは台所として使われていた家屋であり、遺体はダラ外の左側に、赤ん坊とともに埋葬された。この場合、赤ん坊もほぼ同時に死亡したのでその子どもの所属の問題は生じなかつた。

近年では、ひと昔前ではその存在が考えられなかつた「未婚の子持ち女性」が村に見られるようになってきている。ルオ社会では本来、未婚で子どもを持つことが許されていなかったため、婚外子に対しては嬰兒殺しが行われてきた。しかし最近はそうした慣行が行われなくなつたという傾向に乗り、顔をしかめられつつも未婚の子持ち女性の存在が許される状況になってきている。こうした女性が死亡した場合、死者儀礼は一切行われず、未婚で死亡した女性表 (ハ)、(ニ) と同じ扱いになる。しかし問題は、彼女の残していった「シンバの子 (*nyathir simbá*)」と呼ばれる、社会学的父のない子どもの所属問題である。昔はなきものにされてきた、このような婚外子の扱いはまだ定まらないままである。現在は個々に長老を交えての話し合いのもと、解決を図っている状況である。

事例三 実家に戻っていた既婚女性の場合

オバラという老人が、長患いの娘を嫁ぎ先から生家に呼び戻した。老人はその娘を可愛がつていたため、自分の手で治してやりたかつたのである。彼は評判の薬師のところまで自ら歩いてゆき娘のために薬を手に入れ与えたが、その甲斐な

く娘は彼の妻の家で死んでしまった。そこで彼女の兄弟たちは遺体を彼女の夫のもとへ移送し、埋葬した。そしてその後、村人はうわさをしだした。「オバラは間違いをおかした。娘を自分のダラの中で、しかも妻の家で死なせてしまった。何か悪いことがおきなければいいが——」

上述のように、既婚女性⁽¹⁴⁾は夫のダラに自らの家屋をもち、そこで死に、その左側に埋葬されるものとされている(図(ホ)、(ヘ)、(ト)、(チ))。いかなる理由があつて生家に戻つていたとしても、彼女は父のダラの外で死ぬものとされているのである。もし妻が夫の家に戻れない場合は、死に場所として臨時小屋をダラの外の左側に建て、そこで通夜もなされるべきだという。ここに挙げた人びとの発した言葉からは、オバラの犯した違反にたいし危機感をもっていることがうかがわれるだろう。「何か悪いこと」とは違反が引き起こす災い、すなわち「チラ」が生じることを恐れているのである。このオバラの娘の事例と異なり、もし夫がその遺体を引き取ることに合意しなければ、妻は生家のダラ外に埋められなければならない。臨時小屋を建てた場合はその左手に埋葬され、未婚で死亡した女性と同様にその後の儀礼は一切行われないのである(表2、図(ハ))。

事例四 ルオランドを離れ都市で居を構えた既婚男性の場合

公になった最も有名な事例は一九八六年に多くのケニア国民が注目した、S・M・オティエノの埋葬場所をめぐる事件である。オティエノの親族側とキクユ人である妻側が、裁判所という公的な場でオティエノの埋葬場所の決定について争つたのである。この裁判にはキクユ対ルオ、といったケニアにおける大規模な民族集団間の対立、それを操作しようとする政府側の意向をも含み高度に政治性をおびたものでもあり、ルオの慣習がある意味で利用されたともいえる。しかしそれを考慮したとしても、裁判で繰り広げられたさまざまな論争のうち最も興味深かった論点は「ホーム対ハウス論争」であつた。ルオの慣習に基づき儀礼的手続きをふんで建設したところこそがホーム(ダラ)であり、首都ナイロビに建てた婚舎はハウスであり、そこに永眠することはルオの慣習に違反する、というのがオティエノの親族側の主張であつた。他方で妻側の主張は、夫オティエノの出身クランであるウミラ・カガルクランはナイロビにおいて夫の葬式の資金をつくるために

会合すら開かなかつたのであり、夫はナイロビの婚舎を築いた土地に埋葬されることを望んでいた、というものだった。⁽¹⁵⁾しかしこうした主張は最終的に受け入れられなかった [Egan 1987: 3, 22]。

以上の事例からいかにルオが場所に、序列に、こだわりを持つ人びとであるかがみてとれるだろう。さらに埋葬場所について問題となる事例をジェンダー別にみると、男性よりも女性の場合が多く、最も扱いが厄介であるのは未婚の女子の死であるといえよう。

七 まとめ

ルオ社会において人はどのように位置づけられながら生き、死んでいくのか。本稿で描き出されたのは日常生活ではさして明確にされない人の範疇が、死の際に顕在化することであった。そして死者儀礼の遂行方法を男女というジェンダーの二元論に沿って整理し作表した結果、男性が儀礼数という点では手厚く扱われていたことが明らかになった一方で、とくに既婚の女性に対しては、彼女のもつ規準により儀礼の施行方法が複雑化し、男性に比べ分類される範疇の数も多いことが明らかになった。興味深いのは、未婚の女子は日常生活では家事の労働力として妻の働きと同様に重宝されているものの、社会的地位は低く、死者儀礼の対象にもならない扱いであるが(表2参照)、埋葬場所の決定にあたって遺族が彼女のために奔走せざるを得ないことであった。そして遺族の尽力かなわず遺体の引き取り手が見つからない場合、彼女はダラ外に埋葬される。この未婚の女性の処遇というのは、ルオ社会における女性の社会的に不安定な地位を物語っているともいえる。父系であるルオ社会の女性は、結婚によって生家のダラから夫方に組み込まれ、そこで夫のリネージ存続のために子供を生み、やがて夫のダラで死ぬことが期待されている。従って出産可能な結婚適齢期で死した女性はもはや出身ダラに留まることは期待されず、当然のことながらその成員としてはみなされず、所属するダラがないままルオランド内のダラとダラの境界に埋葬されるのである。これはダラで生まれダラで死に、埋葬される、という理想とされるルオ人の

一生とは異なるものの、あくまでも彼女はルオ社会の周縁に位置するルオ人、という曖昧な不安定な状態で死んだことになる。そうした女性の存在について語るときの人びとの様子をみても、それが彼らの生者の世界にとって脅威的であることが感じられる。

また既婚女性が夫との不和や浮気などから嫁ぎ先を去って何十年もした後、あるいは重い病を患いつつも夫の元に戻ってくるのは、明らかにルオとしてそのダラで死ぬためと考えられる。たとえ何十年もの空白があったとしても、夫方親族は彼女を受け入れる柔軟さをもっているといつてよい。あまりの年月のために彼女の家屋もダラも崩壊していた場合、現存する彼女の僚妻たちの形成するダラ内の上方に、またそのダラの上に新たに、彼女専用のダラを建てている例にであった。これは、ルオ女性は一旦結婚さえしていれば、死ぬ場所が確保されていることを示す事例ともいえよう。このように特に女性の葬送のされ方に注目すると、ルオの村落社会では結婚、出産という可変的媒体に依拠してしか社会的地位を保てないルオ女性の境遇が、「どこで死に、葬送されるか」という点に収斂されているかのようにみえる。他方でこのように女性の埋葬をめぐる対処する人々の背景には、ルオ人のもつ死霊への、とくに女性の死霊への強い恐れが働いていることが想像できる。ここからは、ルオ社会の男女関係をみるには生者の世界だけでなく死後の世界をも含んだ視野をもって、儀礼的性交、寡婦相続などにみえる女性のセクシュアリティに対しルオ人のもつ観念と、それに対処するルオ社会のもつ装置を考察する必要性が浮上してこよう。さらに家屋やダラ建設、そして埋葬に際して見られる左右、上下、内外、といった方向についての観念、既婚・未婚、序列、などといった規定の諸要因が多重に絡み合っているために、細かな分析が必要である。その際に考慮を要するのは違反から生じるチラへの恐れである。彼らのもつこの「恐れ」は、ときに死霊への恐れと混在し、重層的恐怖となって人々にのしかかっているかのようである。死霊は、男の悪霊も女の善霊も、性別を問わず常にルオ社会には身近に存在しているのである。

八　むすびにかえて

一四に及ぶ弔いの儀礼的段階、空間に関する思考に結びついた埋葬場所へのこだわり、死者への恐れ、そして死が生み出した寡婦相続という慣習。彼らが固執し続けるこうした観念や慣習は、また男女間に存在する死後の扱いの違いは、どのような形で存続、あるいは変容していくのだろうか。

現在のケニアを構成する「ルオ」をはじめとする「部族」は、もともと植民地行政の必要上に西洋側から押しつけられた枠組みであった〔Hauge 1974: 16, 松田　一九九六、二一七〕。従って現在我々がみる彼らの社会は、その枠組みのなかに生きるにあたり隣接民族や政府といった外部に対するすべとして、あるいは外部の政治的仕掛けによって、自ら集団意識やそれを支える彼らの「伝統」文化を創出するようになった姿であると考えられる。そして特に西洋文明、様々な「民族」の「伝統」文化が混雑した都市という場においては、「ケニア人」という近代国家における一個人として生き、死ぬのか、あるいは各民族、例えば「ルオ人」として生き、死ぬのか、ということが問われるようになってきたのである。前章の最後にとりあげた「ケニア人」として死ねなかつたS・M・オティエノの事例では、一九八六年当時のケニアではまだ自らのアイデンティティを選び実行できるような、「個」の思想が一つの選択肢として受け入れられる土壌ではなかつたと想像できる。

事件より十数年経った現在、土地の売買という以前は考えられなかつた行為がルオランド内において徐々に見られるようになってきたものの、生まれ育つた故郷に埋葬されるべきである、というルオ人の基本姿勢がさして変わっているとは思えない。都市と農村の二重生活が普遍的となってきた現代ケニアでは、とりわけ都市において死亡した人の場合、死者が近代的「個人」であつたことよりもまず何の民族に属するかが問われ、死者の意図に関係なくその社会の「伝統的」規準で範疇化され、葬送されることが期待されているのである。「ルオ人」として死ぬ、ということはこれまで本稿であつ

かつてきたように範疇化され、葬送されることである。そしてその「ルオ人」であるための条件も、「ルオ人」のための葬送儀礼フォーマットも、ルオランドの各所において変容し続けているのだろう。

注

(1) 本稿は、一九九五年八月～九月、一九九六年一〇月～一九九七年二月、一九九七年七月～八月に行なった現地調査に基づいている。

(2) ルオ人に「人は死んでからどこに行くのか」と問うと「そのへんをうろろろしているのき、ダラの中にだっているし、いつもわれわれ(生者)をみはっているのき」という答えが返ってくる。また「人は死ぬと何になるのか」と聞くと、「ジャチエン(jacheng)になる」という答えがしばしば返ってくる。人の魂(chuny ngai molho)は霊的存在になり、そのうち人びとを祝福するよい魂(chuny maja gueth)と人に悪さをするジャチエンがあるようだが、一般的に死者はジャチエンになるイメージが強いようである。そうした魂は死者が死亡したり埋葬された場所付近に見られ、また自由に動き回ることができ、ときに人間や他の動物などと化して現れることができる[Hauge 1974: 112]。こうしたことからわかるように、ルオも基本的にナイロート世界に典型的な、水平的モデル(horizontal model)で世界観を説明するようである[Jacobson-Widding 1991: 25]。

こうした死生観との関連事項として、例えば変死や自殺をはじめ、当該社会において特異とされるさまざまな死因によって人が死後どのような種類の死者になるか、という死因と死者観念の関係したロジックがあると考えられる。死者が成りうる魂のなかにも様々な種類があり、阿部の分類によれば人は死の状態によって死後、(一)善き祖先、(二)憑依霊、(三)怨霊のうちのいずれかになるという「阿部 一九八三:二七—三二」。しかしながら本稿ではこうした死因と死後の扱われ方、死者の種類、というルオの思考体系や妖術との関係などを分析することはせず、あくまでも一人の人間が死亡した時点から吊いの一連の儀礼的段階をどのように踏むのかを考える。(彼らにとつて)変死をした場合、たいていは本稿で紹介する一連の死者儀礼が基本として行われるが、若干の儀礼的手続きが加わったり墓の場所や作り方が異なることがある、ということわりを付すに留めておく。

- (3) こうした最小居住単位であるコンパウンドやその集団そのものを示すルオ語として「ダラ (*da la*)」のほかに「パチョ (*pacho*)」がある。私の調査村では前者のほうが頻繁に用いられていたため、本文においては「ダラ」と呼ぶことにする。「コンパウンド」の概念については拙稿を参照願いたい【椎野二〇〇〇予定】。
- (4) ルオのライフステージについては、(9) 参照。
- (5) 東アフリカにおける父系社会の多くは、とくに空間的シンボリズムを分析する際に二分法を用い男世界、女世界という対比で描かれてきた【Jacobson-Widding 1991: 31】。本稿でもこれにならない、とりあえず男女というジェンダーの二分法で分析することを試みる。
- (6) 規則を守ることに固執する人びとの思考は、規則に違反すると死霊による、また彼らの信じる超自然的な力、チラ (*chira*) によって不幸がもたらされるという恐れと表裏一体であるかのようなうだ。「*chira*」とは禁止規則 *kuwa* に対する違反行為とそれがもたらす災厄の両方を意味」するのであり、「災厄 (*chira*) は、違反を犯した当人を襲うこともあるが、しばしば当人が保護すべき下位の者を襲う」のである【阿部 一九九三・三五〇】。逆にいえば、チラがあるからクウェルが存在する。チラという超自然的概念はルオ社会において守るべき「規則」を生み出す、あるいはそれをバックアップする力的存在ともいえるだろう。またチラは場所、そして性と関連した不幸をもたらす原因、またその結果の双方を指すが、これはルオの空間利用の思考と性の観念の関連性を意味している。
- (7) 各儀礼の施行方法の詳細は、拙稿を参照願いたい【Shino 1997】。
- (8) 加えて近年の状況としては、カソリックや外来のプロテスタント、またアフリカ独立教会など死者が所属していた教会の違いによる死者儀礼の相違がみられる。しかし一般に、埋葬式のみ死者の属した教会の聖職者やそれに準じる役割をもつ人によって行ない、あとは本稿で扱った「伝統的」方法で儀礼を施行する。
- (9) 死の際に顕在化する社会的範疇は、現在もおぼろげながら存在する、成長過程に応じたライフステージとは若干異なる。つまり結婚の時期や出産の有無は個々人の諸事情により異なるからである。昔はより明確に存在していたであろうライフステージも、特にステージの移行期に通過儀礼として行われていた抜歯が独立前後の三〇年程前から行われなくなった結果、その存在の希薄化に拍車がかかったと考えられる。

(10) ルオ人が考慮する序列とは、長幼、結婚の順番の二種類があげられる。結婚の順番による序列とは、早く婚入した女性から順に、その女性の年齢に関係なく第一、第二、第三夫人……という地位を得ることである。それ以後、その女性婚入したクラン内において、該当する番号の地位にふさわしいようにふるまい、生活していくことになる。夫との不和からある妻が長期間不在になった場合、それより下位に位置する妻が一人分ずつ上位に上がっていく。ガラ内では何事も一番初めに着手することになっている第一夫人が不在になるとガラ内の生活上の運営が滞り秩序が保たなくなるため、その状態を回避するためにしばしばこうした操作が行われる。長幼の序列とは出生の順番によることであるが、実際には必ずしも出生順を意味せず、各息子の母の序列が反映することがある。すなわち、第一夫人の息子が必ずガラ内の長男でなければならぬのである。従って例えば第二夫人の第一子がガラ主である夫の初めての息子であっても、その数年後に生まれた第一夫人にとって初めての息子が長男になるのである。

(11) 後者の儀礼的性交には子どもの誕生、新たなガラ建設や新しい家屋の建築の際、農作業の開始の際などといった機会のほかに寡婦相続の際に行なうものが存在する。本論では埋葬場所について問題になるときのみをあげたが、あえてここで儀礼的性交について問題となる一例をあげておこう。それは寡婦相続を終えるまえに死亡した寡婦の事例である。ルオ社会では社会人類学でいう寡婦相続(widow inheritance)が行われることになっているが、特徴的なのは、その際に儀礼的性交をともなっている点である。従って寡婦が相続される前に死ぬというような事態が生じると、遺族は未相続のまま死体と化した寡婦と性交する男を探す、という難題を抱えることになる。この性交は寡婦が新たなパートナーを得た状態で死んだという擬似的状況を象徴的につくり出していると考えられる。しかしそのような条件を飲む男は大抵他クランや異民族からやってきたゆきずりの異常者が多く、遺族はその男に対し多額の報酬やウシを支払う。

(12) このような男性は他クランの出身者でなければならず、既婚者であることが多い。死者の姉の嫁ぎ先であることもある。姉の夫は死亡した義理の妹を、最年少の妻として葬るのである。これに関連して、子どもをもたずに死亡した姉の嫁ぎ先に、その妹が姉になりかわって嫁ぐこともある。また遺族は、娘の遺体を引き受けてもらうかわりに、別の年頃の娘を連れてくることを約束することがある。その場合、男は彼女のために婚資を支払う義務がある。

(13) 未婚の女性を埋葬する前には、擬制的に彼女が結婚したうえで死んだ状態にするため、ピム(bin)と呼ばれる老婆によつ

て処女膜が破られることになっている。ルオの伝統的結婚においては、処女膜を破るという行為は重要な意味をもっているからである。

- (14) ルオ社会では、離婚とは支払われた婚資が全て返されたときに成立する。しかし一度支払われた婚資はたいてい妻方の男系リネージの間で分配されたり、結婚や葬送の儀礼の際に使われるために婚資の返還は難しく、離婚が成立することはめったにあり得ない。ルオ一般に離婚率が低いという研究があるが [Potash 1978]、その諸原因として、父系のルオ社会での土地分配は実母を通じて男性にしか行われず、女性結婚することによってのみ夫から使用できる畑を与えられる、という土地に関する慣習法、また結婚の契約は死では解決されない [Ocholla-Ayayo 1974 : 144] という概念のもとに続けられる寡婦相続の慣習などがあげられよう。

- (15) ルオの人びとは故郷を離れ出稼に行った場合、同郷人による葬式互助組合を組織している。各組織に会則があり、会員は毎週あるいは毎月集会を開いて積み立て金を払う。会則のなかで興味深いのは、ルオ人として一人前ではない五歳以下の子どもは都市の共同墓地で埋葬することになっている、ということであった。

謝辞

本稿のもとになったケニアにおける調査期間は(一)のようであるが、そのうち第二の期間は佐藤俊教授(筑波大学)、松園万亀雄教授、堀信行教授(東京都立大学)のご配慮により、第三の期間は文部省国際学術研究(代表者…松園万亀雄)の補助金によって行うことができた。心から御礼申し上げる。

参考文献

- 阿部年晴 一九八三「ルオ社会の災因論における死者と妖術・邪術」『一橋論叢』九〇—五、一橋大学。
一九九九「世界観とその表象」川田順造編『アフリカ入門』新書館。
Egan, Sean (ed.) 1987, S. M. Otieno : *Kenya's Unique Burial Saga*, Nairobi : Nation Publications.
Evans-Pritchard, E. E., 1940, *The Nuer*, Oxford : Clarendon Press. (エヴァンズ=プリチャー、一九九七『ヌアー族—ナイル系一民族の生業形態と政治制度の調査記録—』(向井元子訳)平凡社。

- Hauge, Hans-Egil 1974, *Luo Religion and Folklore*, Solo : Universitetsforlaget.
- Jacobson-Widding, A. 1991, Subjective Body, Objective Space—an Introduction. Jacobson-Widding (ed.), *Body and Space*, Uppsala : Acta Universitatis Upsaliensis : Sweden.
- Kenya Government 1994, *Kenya Population Census 1989 Volume I*, Nairobi : The Government Printer.
- 松田素二 一九九六『都市を飼ひ慣らす——アフリカの都市人類学——』筑摩書房新社。
- 松園万亀雄 一九七九「グシィの葬礼——二元的人間属性と社会的距離の分析——」『アフリカ研究』一八。
- Milikin, A. S. 1906, Burial Customs of the Wa-Kavirondo of the Kisumu Province. *Man* 6 (35).
- Ocholla-Ayayo, A. B. C. 1976, *Traditional Ideology and Ethics among the Southern Luo*, Uppsala : Scandinavian Institute of African Studies.
- Potash, Betty 1978, Some Aspect of Marital Stability in a Rural Luo Community. *Africa*, 48 (4).
- Shino, Wakana 1997, Death and Rituals among the Luo in South Nyanza. *Kyoto University African Study Monographs*, vol. 18, No. 3-4.
- 椎野若菜 二〇〇〇予定「マレーのカンボバ、アフリカ大陸へ行く」『社会人類学年報』二六。
- Southall, A. 1952, *Lineage Formation among the Luo*, International African Institute Memorandum XXVI, London : Oxford UP (International African Institute).

(東京都立大学大学院 社会人類学)